

「活・人・経・営[®]」コラム第 117 回

＜特異点に潜む経営成果＞

特異点 (singular point) という言葉があります。一般的な基準や手順で求められない特殊な点のことで、数学では直線グラフが折れ曲がって尖ったところなどを指し、なめらかな前後の繋がりがなく微分が出来ません。物理学ではビッグバンやブラックホールなどが該当します。「AI が AI により人智を超える時点」を幅広い概念でシンギュラリティ (singularity) と表現し、最近は日常でも一般的に用いられています。

身近な経営上の事例として、「製造工程の思わぬエラーで不良品が多く出てしまった」「顧客企業から手間のかかる特殊注文が入った」「技術開発中に予期せぬ研究成果を得た」「自社の主力製品が突然売れなくなった」「苦境の顧客を援助したら想定外の経営評価を得た」・・・等々です。

日常の仕事に於ける思わぬ失敗や成功、その他偶発的に起きるピンチやチャンスなどの特異点を、今迄のやり方を変革する機会と捉えて、価値の高い新たな経営成果を創出した事例が古今東西の企業で報告されています。更に、過去の延長上にない不連続な試みにも意図的に挑戦し、模倣困難な独自の経営価値を積極的に創造し、非連続を連続している企業も存在します。

特異点には通常気づきにくい変革のヒントやアイデアが潜在しており、時として競争優位な経営成果やイノベーションを創出します。この場合、見えない兆候や価値の存在に気付く直観力や、的確な判断・決断を要する胆力がリーダーに求められ、現状を俯瞰する分析力、リスク (損失) 対策、組織行動を促進する夢や活力を呼び込むマネジメントも欠かせないでしょう。

＜成果を生み出す行為＞

「経営」とは、業務を遂行する行為です。その目的は「成果」によって定義されなくてはなりません。

企業においては、成果とは利益と損失によって決定されるものを指します。では、病院ではどうか？ 大学ではどうか？ 教会ではどうなのか？ — 成果は「理論」からではなく、世の現実の中で実際に生じる物事の内側から生み出されるべきものです。非常に重要でありながら困難でもあり、そして何よりおもしろいものである。成果を生み出す業務行為こそ、経営そのもののなのです。

— 出典：「ドラッカーの遺言」ピーター・F・ドラッカー著 窪田 恭子訳—